

研究課題

# 生徒の学習意欲を引き出す「学習評価システム」のバージョンアップ

副題 ～自らの学習状況を捉え、深化・改善のために努力しようとする生徒の育成～

学校名	酒田市立飛鳥中学校
所在地	〒999-6711 山形県酒田市飛鳥字堂之後30番地
学級数	7
児童・生徒数	188名
職員数／会員数	19名
学校長	梅木 仁
研究代表者	梅木 仁
ホームページアドレス	<a href="http://www.sakata.ed.jp/asuka/web/">http://www.sakata.ed.jp/asuka/web/</a>



## 1. はじめに

本研究は、貴財団の助成を受けての継続2年目の研究である。

酒田市郊外にある豊かな自然に囲まれた農山村地域に位置し、三世同居率も高い、教育熱心な地域性の中で、温かな家庭に育まれた本校生は、素直で純朴な生徒が多いものの、積極性に欠け、自己表現力に物足りなさを感じていた。学習面においても、何事にも素直で真面目に取り組もうとするものの、受動的な学習態度に留まり、自ら進んで行う「活用」「探究」の学習が苦手な生徒が多く、困難に挑戦しようとする意欲に欠けているとの課題が見られた。一方、新要領への完全実施を控え、知識・技能の習得と思考・判断・表現力の育成とともに、主体的に学習に取り組む態度を如何に育てていくか、早急に、学校の対応が迫られる中で、中教審からは「学習評価の在り方について」の報告が出され、学校の創意工夫を生かす現場主義を重視した学習評価の推進が提言された。然るに、学校現場では、「目標準拠の評価」導入の趣旨理解も未だに浸透せず、観点別評価の「関心・意欲・態度」「思考・判断・表現」の評価の在り方についても混沌としている現状にある。このような時代の要請に応えながら、学校課題解決のために、「学習意欲を喚起する学習評価システム」を開発し、今日的な学習評価のあるべき姿を提言し、授業改善に繋げるものにしたと考え、研究を進めてきた。

1年目の研究を振り返ると、教師の授業づくりの意識が大きく向上した。1時間毎に学習のねらいを明確にして授業に臨み、個々へのねらいの達成状況を常に意識しながら授業展開。生徒の学びのよさを認め、伝えるために、一方的な教師

主導の教授的な授業展開から、生徒が主体的に活躍できる学習場面を意図的に授業に盛り込むなど授業改善が進み、生徒も自らを積極的に表現しようとするなど、活気ある授業風景が広がってきた。反面、丁寧に学習過程を評価することで、想定以上の事務の多忙化を生むとともに、あまりに詳細になり過ぎて逆に大局が見えにくい状況を作り出してしまった。また、学校研スーパーバイザーからは、教師の経験や考え方の違いによって、生徒の活躍する姿を捉える目、捉える範囲、見え方の視点に大きなズレがある。共通理解を進め、教師の評価力の質を高めていく必要があるとの助言をいただいた。このような成果と課題を踏まえ、2年次には、多忙な中学校現場でも実践可能で、生徒の学習意欲喚起により有効な「学習評価システム」のバージョンアップに取り組むものである。

## 2. 研究の目的

本研究は、生徒の学習意欲を高め、主体的な学びを拓くための「学習評価」の改善に係る継続研究であり、同時に、教師の授業改善を促す取り組みでもある。意欲を高める評価とは、学習過程における生徒の学びのよさを認め、学習後の到達状況を的確に把握し、伝え、きめ細かな指導をもって不足を補い、学習の定着を確かなものにしていく評価である。そのためには、学習過程における生徒の“学びの質の高い姿”を捉え、伝え、学級に広げる“活動評価（パフォーマンス評価）”を適切に行い、その状況を適時的に伝える“学習メッセージ”を送り続け



ることを大切にしたい。そのことで、生徒は学びの範を意識し、よりよい学びの姿を求め、積極的に学習に臨めるようになることを考える。そこで、2年間継続して貴財団の助成を受け、知識や技能の習得と定着の状況についての評価のみならず、自ら考え自ら判断するなど、その身に付けさせ方にこだわりを持ち、ICT を効果的に活用することで、多忙な中学校現場でも実践可能で有効な“学び方を学ぶ”過程を評価できる「評価システム」を開発しようとするものである。

### 3. 研究の方法

#### (1) 1年次の研究を総括し、その成果と課題を踏まえ、“実践可能”で“有効”な「学習評価システム」にバージョンアップさせるための改善策を具体的に検討する。

- ① これまでの「学習評価シート」の様式を見直し、個々の学習状況が大観できるものに再構成する。
- ② 「成績原簿」をデジタル化し、生徒に公開すると理解を共有し、事務処理負担の軽減を図る。
- ③ 職員室 PC から入力した「評価シート」が、PC ルーム内で生徒が閲覧できる PC 環境を整備する。

#### (2) 生徒の学習過程を評価する、教師の評価力の向上（「学習メッセージ」の質の向上）を目指す。

- ① 単位時間に、身に付けさせたい学習内容を明確に授業に臨むとともに、学習内容の身に付けさせ方について、生徒が主体的に獲得していけるような授業スタイルを築く。
- ② 学習内容を身に付けていく際に見せる、生徒の学びのよさを捉え、伝え、学級に広げることのできる“活動評価”（パフォーマンス評価）を意識し、丁寧に積み重ねる。
- ③ 山形大学教職大学院 三浦登志一 准教授をスーパーバイザーとし、週時程に位置付けられた研究推進委員会及び学期に2回程度実施する全体研修会で成果検証し、適時的に改善を図る。

#### (3) 学習意欲を喚起する「学習評価システム」を支える3つの実践の充実を図る。

- ① 家庭学習の習慣化を目指した学習計画づくりと“Brushup Note”の活用。
- ② 学び直しの機会としての“Phoenix Time”の設定と指導の工夫。
- ③ 個別支援の必要な生徒のための“Private Teacher”制度の活性化。

(資料1・2)



### 4. 研究の内容

- (1) 「学期末評価」を「単元評価」に改め、授業のねらいを明確にした“学習マップ（シラバス）”を作成。生徒は見通しを持って学習に臨むとともに、単元の学習到達状況を自己評価。単元履修後に生徒が総括評価したものを回収し、3段階の単元評定を付けて本人に返却する。
- (2) 日々の授業において、学習過程における生徒の学びのよさを捉え、伝え、広げる“活動評価（パフォーマンス評価）”を適切に実施し、職員室 PC で作成した、全教科同一様式の「評価シート」に記録。単元評定する際の他の資料（テスト結果、課題提出状況等）も加えて記録し、「成績原簿」とする。
- (3) 教科別に作成された「成績原簿」が、生徒個々に全教科の評価状況が一覧できる「評価表」に転送されるシステムを構築。生徒自身がパスワードを持ち、適時的に PC ルームの生徒用 PC にて、「評価表」を閲覧できる環境をつくる。
- (4) 「評価表」を閲覧した生徒に学習到達状況を確認させ、学びのよさの自覚を深め、次時の学習に生かそうとする意欲を引き出しながら、他の生徒にも広げることで、誰もがそれに近づきたいとする意欲的な学習集団づくりを目指す。また、今後の学習課題を明確に捉えさせ、改善のための努力を促す。
  - 帰りの会に「学習計画タイム」を設け、全職員で家庭学習計画づくりを支援。翌日の朝の会に、実施状況を確認。そのための専用ノート“Brushup Note”を作成し、一人学びのできる生徒を育む。
  - 独力で学習計画の作成が困難だったり、計画実践が続かなかつたりする生徒については、全職員による“Private Teacher”制度を設け、職員1人が生徒2人を受け持つ個別支援に当たる。
  - 単元テスト終了後に仮の単元評定を付け、到達状況に応じた“学び直しの機会（Phoenix Time）”を設け、到達状況を再確認し、単元の「3段階評定」を確定する。

### 5. 研究の経過

#### <21年度末(～22年3月末)準備>

#### ◇1年次研究を総括し、“実践可能”で“有効”な「学習評価システム」への改善。

- ① 詳細過ぎ全体が見えにくかったものから、個々の学習状況が大観できる「評価シート」へ様式変更。
- ② 教科担任が教科別に作成した「評価シート」が、生徒個々に全教科の評価状況が一覧できる「学習評価表」に転記されるシステムの構築とセキュリティ保持。
- ③ 職員室 PC から入力した「評価シート」が、PC ルームで生徒が閲覧できる PC 環境を整備。(～6月)
- ④ 単元総括や単元表展欄を加えた、全学年・全教科の1学

期履修分の新たな「学習マップ」の作成。

※ 夏季休業中に、全学年・全教科の2・3学期履修分の「学習マップ」の作成。

(資料3「学校要覧」)

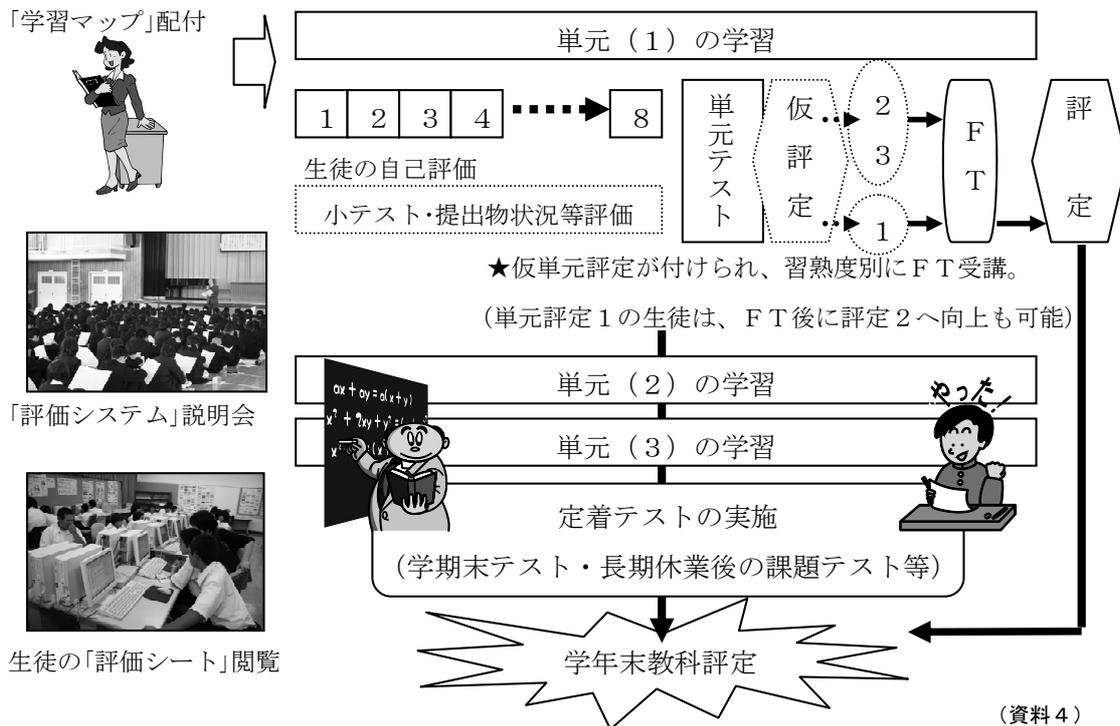
(1) 学習オリエンテーション～今年度の「評価システム」  
変更箇所、及び閲覧方法の説明と試験操作  
(生徒一人一人に「ユーザーID」と「パスワード」の提示)

(2) 全教科・全学年で「単元学習」の開始～“学習メッセージ”の提供

「学習マップ」の配付→授業毎の自己評価(小テスト・課題提出等)→単元自己評価総括→単元評定→「学習マップ」返却→1週間以内に「評価シート」に入力→適時的に生徒が閲覧→「学習評価表」配付

※ 学期毎に、「評価シート」に入力されたものを「学習評価表」としてペーパー化。

<実践イメージ図>



(資料4)

□ 終会での「家庭学習計画タイム」(BT)の実施。

□ 個別支援の“Private Teacher”制度の説明と登録。

(資料5)

※ 学習計画づくりのためのBUノート(学期別)の作成・配付。

□ 「学び直し講座」(FT)の年間計画への位置づけ、実施方法についての説明と登録。

(資料6)



PTの登録・説明会

・ 3つの教科群に分け、一人年間1回の授業公開の実施(教科群毎にワークショップ型事後研)。

・ 庄内教育事務所の指導主事等を招聘しての公開授業研究会(6月/全教科)。(資料7「指導案」)

・ 酒田市教委の指導主事を招聘しての公開授業研究会(11月/社会・保体)。(資料8「指導案」)



公開授業研究会



ワークショップ型事後研

(3) 学校研究研修会～山形大学准教授 三浦登志一氏をスーパーバイザーとして継続要請

① 「評価システム」改善に係る校内研修会(週1回の研究推進委員会、月1回程度の全職員研修会)

② “活動評価(パフォーマンス評価)”の在り方を探る公開授業研究会の実施。

③ スーパーバイザーによる、改善事項による実践の進展と今後の課題、課題解決の方向性について指導・助言をいただいた研修会の開催(10月)。

④ 「評価システム」の実施状況について、教師、生徒・保護者アンケートの実施と集約。

(4) 評価の在り方に係る校外研修へ参加（評価大学講座、横浜国大学附属中、北区立王子桜中等）

(5) 学期末の学習相談（1学期は三者面談、2学期は学級懇談会、3学期は保護者と二者面談を実施）

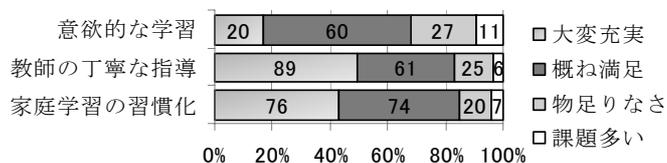
(6) その他、研究成果の発表

- ① 飽海地区中学校長会及び県中学校長研究協議会での発表。また、視察等の来校者への説明。
- ② 「荘内日報社」による紙面紹介、酒田市「研究紀要」への報告。  
(資料9「報告内容」)
- ③ 日本教育弘済会山形県支部「やまがた未来賞」応募、県公務員弘済会研究報告の提出。
- ④ 本校ホームページのアップによる学校研究紹介(H22.9～)  
(資料10「研究紹介」)

(7) 研究に関わる年間反省～研究成果のまとめと次年度の研究再構想と初発指導の準備

## 6. 研究の成果と今後の課題

○ 生徒アンケートの結果、昨度に比べ、学習意欲向上の傾向がよりよく見られる。



- 教師アンケートからは、本研究を通して、大多数の教員が授業スタイルが変化してきたことや、積極的に表現する生徒が増え、活気ある授業風景が広がってきたことを実感していることから、イベント的な授業研究会ではなく、日々の授業の中で、授業改善が進んできている手ごたえを感じる。また、「評価システム」を補完する、“BUタイム”・“FT”・“PT”も機能してきている。「評価シート」入力についても簡素化が進み、多忙な学校現場でも活用できる「システム」に足り得るものに進化してきていると感じる。
- 教育相談の概念を広げた“ガイダンス”を定期的を実施。「評価シート」を閲覧しながらの学習相談機会の充実を図り、生徒自ら学習課題を明確にして、学習に臨める体制を強化したい。
- 山形大学教職大学院との連携を図り、教育学的な検証を踏まえながら、生徒の学びのよさ捉え、伝え、広げる、教科担任の授業における“活動評価（パフォーマンス評価）”の質の向上を目指したい。

## 7. おわりに

貴財団の研究助成の下に、教科の壁を越え全職員が授業改善について具体的に取り組めた2年間であった。教師の意欲が生徒・保護者に伝わり、信頼された学校づくりに結び付いたことに感謝したい。